～昨日の風 明日の風～

経営コンサルタント独白録

［第103回］ 学ばない日本人

戸敷 進一

1956年生まれ、宮崎県出身の経営コンサルタントで、㈱経営改善支援センター（福岡市、URL http://sien.co.jp/）代表取締役。業種を問わない「組織活性化」の専門家で、全国300社以上の企業の活性化を指導。全国の商工会議所や企業などからの依頼で講演活動もおこなう。明確で分かりやすい表現で驚くほど短期間で「組織」を変えるのが強み。
また、帝国データバンクの契約コンサルタントとして九州各地の企業を中心に多くの実績を上げている。

日本企業の生産性が低いことは以前から指摘されています。「日本の1時間当たり労働生産性は、49.5ドル。OECD加盟38カ国中23位」「日本の一人当たり労働生産性は、78,655ドル。OECD加盟38カ国中28位」などという記事は多くのビジネス書や経営者本で目にします。生産性が低い理由は、終身雇用制に代表される日本型経営、長時間労働、高コスト体質、過剰サービスなどが挙げられています。

職業人の学習意欲

日本企業の生産性が低い理由を調べているうちに、あるデータにたどり着きました。パーソル総合研究所「APAC就業実態・成長意識調査（2019年）」というデータです。これは、APAC（アジア太平洋経済協力機構）14カ国における就業者の意識調査です。それによると、14カ国平均値において日本は、読書、資格取得、語学、セミナー参加等と言う項目全てにおいて14カ国の平均を大きく下回っていました。同時に「何もしていない」と言う回答は14カ国平均が13.3%であるのに対して日本は46.3%と群を抜いて多いのです。つまり、日本人の多くは学校にいる間は勉強をするが、社会に出てからの自己成長に対して極めて意欲が低いと言うことを示しているデータです。

経済協力開発機構（OECD）の教育水準に関するデータでは、調査国40カ国中7位と言うレベルにありながらその段階で自己啓発等を含めた自己成長活動が止まっているようです。これらはかなりショッキングなデータでもありました。日本の生産性の低さや、社会における閉塞感の一因としてこうした個人の意識レベルもあるのではないかと考えます。

読書をしない日本人

文化庁が調査した「国語に関する世論調査」（2020年）ではこんな調査報告が行われています。「1ヵ月に大体どのぐらいの読書を行いますか？」という質問に対して結果はこうでした。

①全く読まない　47%
②1～2冊　37%
③3～4冊　8%

なんと半数近い人たちが1月に1冊も本を読んでいないのです。現在では情報インフラが高度化して、必ずしも読書によって知識や情報を得ているわけではありませんが、こうした数字はある意味で異常としか言いようがありません。日々の社会の動きやスポーツの結果、エンターテインメントなどは手軽にネットを通して知ることはできますが、文学、歴史、哲学、科学と言う教養に関わる知識は読書を通してしか手に入れることができません。まして、専門性に関する知識はそうした読書の積み上げからしか身に付けることはできません。しかしながら、日本人の多くはそうした機会を手放していると言う結果です。

全体の15%、8%

組織や社会の中で抜きんでた存在になりたいと考えた時、月に3冊以上の本を読めば全体の15%の中に入れます。月に5冊以上の本を読むとすれば8%の人たちの中に入ります。もちろん、本を読むだけで収入や地位が上がるわけではありませんが、自らの人生を豊かにするためにそうした労力を惜しむと言う事は残念なことかもしれません。

高収入を得たい、ゆとりのある生活を送りたいと願う人は少なくありません。当然そうしたことを実現するためには人とは違う活動や発想が不可欠です。

教養と言う名の武器

一見、実益と直接結びつかない知識は価値がないように思います。しかし、そうした知識と経験が結びついた時、それは教養となります。文化系の人間だから、理科系の人間だからなどの旧式の考えは現代の社会には当てはまりません。歴史や宗教を知らなければ、国際政治や国際経済は理解できません。科学的知見がなければ、これから変化するであろう経営環境を予測する事はできません。ましてや、組織の中の人材育成や組織の存続と発展に関して、教養を持った人間がいなければそれを果たすことはできません。

様々なデータは悲観的なものではありますが、逆に考えれば他を追い抜くチャンスの時期でもあるのではないかと考えます。組織風土や個人の意識変革を促すことは自分自身や周りの人々の幸せにつながることでもあると思います。